

まちを豊かにする“ギャップ”のデザイン

白柳 洋俊 助教
都市・交通計画研究室



こんにちは。都市・交通計画研究室の白柳です。私はこれまで、より良いまちをデザインするために、私たちが「どのように街路を認識するのか」ということについて研究してきました。どうして、まちをデザインをするために、街路、そしてその認識を研究する必要があるのか不思議に思う方もいるかもしれません。そこで、ここでは、私の研究テーマの一部とその目的を簡単に紹介したいと思います。

私たちがまちを理解するとき、街路はとても重要な役割を果たします。なぜなら、我々がまちを理解するのは、そのほとんどが、街路を通る体験にもとづくものだからです。つまり、私たちは街路ひとつひとつの認識を紡ぎ合わせ、まちを理解していると言え、したがって、魅力的なまちには、豊かな街路の体験が必ずあります。一般に、「景観研究」とは、「カタチの議論」だと思われがちですが、私は、このような「街路の体験を解釈すること」が景観研究だと思っています。

それでは、どのような街路が私たちに豊かな体験を提供してくれるのでしょうか。そのひとつとして、街路空間の組み立てがあると考えています。例えば、大街道の晴れやかなアーケードから入った二番町の印象と、一番町から入った時の二番町では、同じ二番町の印象であっても随分と違うものになるのではないのでしょうか。アーケードから入った方が、より猥雑で夜の飲み屋街らしい二番町の風情を感じるのではないのでしょうか。

こうした直前の体験が次の印象評価に影響することを心理学では係留効果と呼びますが、その効果がどのようなことに端を発するのか、心理実験により解き明かそうとしています。現時点の成果にもとづけば、係留効果は沿道の商店がどのような情報を発信しているのか、そのギャップが大きいほど強く現れることがわかってきています。

こうして考えると、まちづくりにも新しい方向性が見えてきます。歩いていて楽しい街を演出したいなら、店舗の発信する情報の量のギャップを街角で演出する。これだけのことで、街路の体験がより豊かなものとなるのです。建物が不揃いだから、まちづくりは意味がないなんて思う必要はありません。勘所を押さえたとちょっとした工夫によって、魅力的な街路体験は提供できるのです。さて、こうした魅力的なまちをデザインするためのヒントは、実際にまちを歩くことでこそ、見つかります。みなさんも、魅力的な体験を見つけに、まちに繰り出してみませんか。



図：大街道と二番町。大街道から入る二番町は、より一層飲み屋街らしい魅力を感じるのではないのでしょうか。